

歴史の地理的基底

——歴史地理学への断想——

一、地理と歴史との間

歴史家の父といわれるギリシャの史家ヘロドトス（紀元前四八四—四二五）は、ペルシャに対するギリシャ民族の勝利の歴史を綴らんとした時、今日のように歴史学が発達せず、その資料を主として叙事詩や地方の記録、あるいは口碑伝説に頼らざるをえなかった当時において、実証主義者であった彼はその歴史の演じられた舞台ともいべき諸地域を自ら実地踏査を行うことよって補い、その目的を果そうとしたといわれる。紀元前四五年頃故郷を出た彼は、当時ギリシャ人の関心をもつ全領域にわたって旅行を続け、ギリシャ本土およびその植民地はもちろん、黒海よりキムメリアーのボスポロス、地中海のキュプロス、キュレーネー、テュロス、そしてさらにエジプトではナウクラティスよりエレバンターネーにいたり、ペルシャではスーサにまで達したといわれ、またアヌスリヤーやポントス、小アジアにもその足跡を印した⁽¹⁾。

歴史の演じられる舞台としての土地、その地理を知らずしては歴史も十分な理解に達することができないことは、

実証史家へロドトスに限らず多くの歴史家の見解であったことは人の知るとおりである。いわゆる地理的史観は近代の産物ではなく、「古代哲学と共に古代歴史学が神秘主義よりして自らを解放せんとしたとき、ギリシャにおいて一般唯物論とともに地理的唯物論、即ち地理的史観が開拓せられたのであった。」⁽²⁾ツキディデスはその著ペロポネッス戦役の歴史においてそれにふれ、ヒポクラテスは「空・水・および土地」において言及し、それはさらにストラボンの地理学にも及んだ。かかる自然的地理的基底から歴史を考察しようとする立場は、以上の例にとどまらず、フランス革命前期の啓蒙主義者たちによってさらに踏襲され、ボダンはその名著国家論においてそれにふれ、モンテスキューは「法の精神」においてこの問題を論じてアジアとヨーロッパの歴史を比較し、アジアの無力、欧州の強力、アジアの隷属性、欧州の自由は、その地理的環境殊に気候や地形によってもたらされるさまざまな性格をもつ民族の対峙状態に由来するものであると考えた。しかし、人類の歴史を全般的に眺め、人類史展開の根底に風土的規定を強調したのはヘルダー（一七四四—一八〇三）であった。彼はその大著歴史哲学の第六巻において、地球上に住む人類の諸集団とその生活状態について概述し、第七巻にいたり、人類が地域的に文化的差異をもつのはそれぞれの地域の風土の故であることを述べ、その歴史もまたこのような風土の性格をもつものであることに論及した。彼はしかし、具体的な歴史地理的描述には達していない。さらに世界史の著者ヘーゲル（一七七〇—一八三一）もまた、精神が民族や国家の活動を通して歴史をつくりなしていく過程を説き、「精神」の特殊化としての「地方精神」の自己示現たる民族活動の根底をなすものは風土化であり地理的特殊化であって、このような風土化は世界史の展開にとって必須条件であることを論じた。風土化の原理として彼があげたのは「高地」「河谷」「沿海」の三つであって、世界の各大陸におけるこれら三つの占める状態によって、それぞれの歴史の基本が、したがって、世界史のよってたつ

基盤がつくられていることを説いた。ヘーゲルの時代、すでに近代人文地理学の創設者としてのリッター（一七七九—一八五九）が現われてその「一般比較地理学」（一八一七—一八一八）を著していたが、彼もまた人類の歴史を通して地球と人類の密接不離の関係を強調していたのであった。今日のように人文・社会諸科学の十分な発達をみていない当時、彼は地表における人類活動の総和としての歴史をとりあげたのであった。しかし、このような地球と人類との関係を主題とする人文地理学の探究は、ラツェル（一八四四—一九〇四）にいたり、歴史をもって運動であるとする見解が出されるにいたった。運動はあらゆる生命をもつものの本質的なものであって、生命とは外部の刺激によって生ぜしめられているところの内部的運動の総和であるとされ、このような運動は空間的運動であって、空間的支配となり、したがって、この空間的支配は生命の象徴ともいえる。この運動に対しては不変なる地理的自然は常に同一の影響を及ぼし、人類の歴史を規定するのであって、これはとくに位置と領域の二方面から考えられるべきであるとされた。

英国文明史を著したバックルをはじめとして、いわゆる地理的史観をとった人々は数多く、これらの見解に多分に地理的条件を重視するのあまり、歴史をつくる人間の主体性あるいは自発的精神を軽視するがごとき傾向もみられたが、これらはしかし、歴史の成立における空間性ないしは地理性の極めて重要であり無視することのできないものであることを示しているといえる。「地理性は歴史にとつてあってもなくてもよいような偶然的非本質的なものではなく、歴史を構成する必然的本質的契機であるともいえる。とりあげられるべき学問的問題は、歴史と地理との関係があるかなしかの詮索ではなく、いかなる関係にあるか、関係がいかにあるかの真実を正確にとらえることにあるのである」¹³⁰。

では、いかなる地理的基盤をいかに把握することにより、歴史をどのように説明するか。「地理的基盤とはいったいどのようなものを指すのか、それが歴史とどのように関わりをもつか。「地理学と歴史とは舞台と劇曲との関係なり。地は人類てう役者が歴史てう劇曲を演ずる舞台なり。故に地理学なくして歴史を学ばんとするものは、盤なくして碁を囲まんとする如く、盲人が天文学を攻究せんとするが如く、全く為し得べからざるにあらざとも殆ど為し得がたき事なり……」¹⁾と論じられはするが、具体的学問的にその真実はいかなるものであるかということである。近來、地理的自然に関する究明はまことに微に入り細をうがって進められている。いわゆる自然地理学の発達は、その地理学としての本質を忘れたかの如く、地形や気候の細部にわたって探究されていってとどまるところはない。そこでは歴史や人間と関係があるかどうかはほとんど問題にされず、それは、人文地理学あるいは歴史地理学の専門分野であり、自然地理学はもっぱら自然そのものの探究に専念すればよいとの専門的態度がうかがわれる。しかし、これは学問の発達にとって大切なことといえる。したがって、自然地理学の発達そのものは歴史地理学や人文地理学の発達には直接関係をもつものではなからう。「自然」の探究と「自然と人間あるいは歴史との関係」の探究は全く別個のものであるからである。「自然と人間あるいは歴史との関係」はもはや自然地理学の立場ではなく、その場合の自然は人間の社会やその歴史の中からとらえられるものである。それは自然現象でもなければ、また自然的事実と人間の事実の合成でもなく、明らかに人文的社会的事実である。しかし、それをみるために必要なのは自然地理学の高度の知識である。自然地理学の知識なくしては、社会や歴史の中からの自然も十分に理解できない。そしてそのためには、自然地理学はあくまで地理学としての本来の職能を果しておらなくてはならない。かくて、自然地理学はじめて人文地理学や歴史地理学にとって大きな力となることができるのである。

二、歴史の地理性

一般に歴史の地理性といわれるものはどのようなものを指すのであろうか。ただたんに、自然あるいは土地という舞台において歴史という劇曲が演じられているという事実だけを指すのではない。歴史そのものが土地なくしてはあり得ぬものであり、成立し得ないものである。歴史はいうまでもなく人間とその社会の歴史であり、人間の生活や社会の動きは土地において、その土地を媒介として成立するものであるからである。いわゆる歴史的事実はこのような現実態から、人間や社会の動きだけを抽象してみるものであるといっても過言ではない。ただ、このような現実態をいかに把握し理解するか、地理的構造とか地理的基底とかいわれるものは、具体的にどのようなものをいうのであろうかということである。

地理的条件としてあげられるものは実は単純ではない。位置・距離・面積・地質・地形・土壌・海洋・陸水・気候・植物・動物、そして地球自体の数理地理的な性格など、まことに複雑である。しかも、これら諸事象は別々に孤立してあるのではなく、いずれも相互に結びついて密接不離な関係にあり、地域的特殊性をもって存在している。人間の生活の環境としての地域の自然は、まさに斯くのごとき構造をもつものであるがゆえに、そのどれか一つだけの自然的事象だけをとりあげて歴史地理学的解釈を行うのも片手落ちであり、しかも直接的間接的關係の両面も考慮されねばならぬ。日本の風土あるいは水土と一口にいうけれども、それはモンスーン的気候だけを意味するのではない。日本の地理的自然はいわば以上のごときさまざまな自然的諸事象の複合合成のうえに成立している。日本人の生活、社会は、その何れか一つの自然的事象だけを環境としてしているのではない。総合的にみて気候条件の優位が主張さ

れることはあるにしても、それは他の自然的諸事象を度外視したものではない。モンスーンの・砂漠的・牧場的などの風土の三類型も、このような吟味の結果考えられたものであらねばならぬ。若しこのような吟味を欠いているとするならば、地理的自然に対する見方は片手落ちであり、結果においては素人くさい素朴な環境論に随し去る要因の一つともなる。

従来、一般に地理的環境論といわれるものは、自然と人間、自然と社会、あるいは自然と歴史の関わりを、いくつかの地域的事例を比較することによって明らかにしようとするものであった。事例が多ければ多い程、この関連の事実は確実なものとなり、より普遍性をもつものとなるが、何分にも広い世界のこと、しかも、たえず時とともに変化のあるものであるゆえに、容易にこの普遍性を把握し得ず、きわめて例外の多いものとなる。学問はすべてそれぞれ歴史的時代的意義をもつものであり、ことに人文・社会諸科学は歴史的人間を対象とするがゆえに、絶対的に普遍的なものはないものであり、必ずその法則や理論には例外がつきまとうものであって、しかも放任すれば斯くなるという条件付きであるといえる。かつてF・ラツェルが人間を動物の一種として扱い、その法則樹立に当っても自然科学的で、性急な片手落ちのものであったことはL・フェブウルをはじめとして一般に指摘されるところであるが、さりとて人間の自発的能動性を強調するの余り、可能論のごとき一種の偶然的非決定論に傾くのであってはまさに逆行というべきであらう(5)。「自然と人間」といった問題は一般に通俗的にも考えられるものであり、通俗的な地理的知識を基にして通俗的風土論が横行する。しかし、学問的には通俗的状态では許されない。これを避けるには、学問的に地理学としての実証的研究を積み重ねていくよりほかに方法がない。自然と人間、自然と社会などという問題は、他の人文・社会諸科学でも何らかのかたちで扱うのであって、このような他の諸科学の理論をそのまま借

用して解釈するのであつては、地理学本来の目的を達成し、その職能を果すことはできない。このようなことでは、理論的にも空転してその学問の発達は望まれない。人文地理学や歴史地理学の場合、従来の大きな欠陥は、このような理論構成のための実証的研究の努力を行わなかつた点にあり、あり来りの素朴な環境論や風土論に停迷したのも、それを批判し、さらに盛りたてていく地理学としての実証的基盤を欠いたがためである。他科学の知識や理論を参考とし利用することは、学問の発達にとって絶対必要であるが、そのままでは他の科学に追隨する以外に何もも為し得ず、一つの独立科学としての職能を果すことはできない。しかし実証的研究とはいいながらも、理論構成に背を向けた、たんなる平盤羅列的な地誌的描写にとどまるのであつてはあまり効果はないといえよう。大切なことは「自然と人間との關係」に関しての実証的資料を積極的に得ることであり、これは人間や社会の側から探求されねばならぬものである。

しかし、人間の行動を規定する地理的条件は、その地域の自然的条件のみにとどまらない。ある時代のある地域における人間行動の条件となるものは、その地域の自然を含めた地域全体の自然的・人文的総合的諸状態であり、さらにその地域と何らかの交渉連関をもつ他地域の、あるいはそれを含めたより広い地域の状態やそれとの關係である。人間の行動を規定するいわゆる地理的条件はこのように複雑なものである。しかもある一時代のみならず、長い時間的歴史的過程においてこの問題が明らかにされて、この關係が複雑な構造をもちながら変化し推移することも認識されなければならぬ。歴史の地理性は斯かる複雑な構造を実証的に究められてはじめて明らかにされるのであつて、これは歴史地理学に課された大きな責務である。かくて、歴史はその生成発展の構造に関する歴史的解明にとどまらず、何故その地域においてそのようにあるかの歴史地理学的課題を明らかにすることができ、その究極的解決に達し得るも

のと思われる。

三、乾燥アジア史と脈動説

西南アジアから中央アジアにかけてのアジアの内陸地域は、中緯度高圧帯に位置し、大陸度も高く、加うるに南の印度洋や太平洋などの外洋との間にはヒマラヤを主幹とする東西に走る高峻な褶曲山脈を、北方の北極海との間にはシベリアの平原を距てて、同じく東西にそれぞれ平行して走る天山・アルタイ・サヤン等の諸山脈をもつゆゑに、外洋からの湿潤な風の流入が阻まれて強度の乾燥気候を呈し、降水量も極めて少く(甚だしきはタリム盆地のカシユガルのごとく年間九〇ミリ以下——しかもその三分の二は夏に降る——)のところもみられる)、湿度も低く、森林の繁茂を許さないため、雨量と湿度に多少の地域的差異をもちながら、一般に砂漠や草原の植生を示し、農業による居住地域の形成は主としていわゆるオアシスの周辺に限られ、雨量二二五ミリ以上の可耕草原を除き一般的には草原においては遊牧の生活が展開してきた。東北方は黒竜江上流のアルグン河流域から始まり、蒙古高原、トルキスタン、そしてパミル高原やカラコルム山系を経てイラン高原におよび、さらに西方アラビアより北阿のサハラに続く一大乾燥地域を形成している。このような乾燥地域の住民によるアジア内陸地域の歴史は、中央アジア史・西アジア史として、中国史やインド史等とともに東洋史上極めて重要な分野を形づくっていることは周知のとおりである。そしてまた、乾燥地域の歴史を特色づけるものの一つとして、匈奴・回鶻・蒙古等の諸民族による国家が相次いで現われ、それぞれ広大なアジアの中心部を支配しつつその周辺の諸民族の国家と種々の関係をもち、特に東西交通を中心としてそれらの間の文化の交流に少からざる役割を演じていることである。マルトヌヌによると乾燥地域は外洋河川の流域、内陸河川

の流域、それに無河地域の三種類に分けられ、外洋河川の流域にはいわゆる古代文明の発生をみたが、他にはそのような顕著な事実は比較的認められず、扇状地や泉によるオアシスには、その肥沃な土壌とあいまって集約的農業が小範囲に限って行われ、トルキスタンの山麓地帯にみられるようないわゆる「漠島」を形成し、ステップでは羊・山羊・牛・馬などの家畜を追い一つ一定の領域を季節に応じて移動する遊牧の生活が支配的である。水が生命の源泉ともいふべきオアシスの生活には、とくに灌漑設備や湧泉に細心の注意が払われ、東トルキスタンのトルファン地方に多くみられるカレズとかイランのカナートなど、乾燥地特有の施設がみられる。オアシスは狭いものでも二五〇平方料、広いのは二八〇〇平方料にも達するが、いずれもその周辺は広大な砂漠や草原によって囲まれているゆえに、居住地域の形成は局限され孤立化してオアシスの一つ一つが小国家の体裁を具え、史上「西域三十六国」の呼称さえ生じた。人口の増大により居住地や農耕地が不足して来ると農業より手工業が独立し、天然資源の開発も行われ、さらに土地関係から離脱した商人を社会的に進出せしめることにもなる。やがて一オアシス内にとどまらず隊商を編成し砂漠を渡り山を越えて販路の拡張に挺身し、さらに他国の産物の仲継も始め、アジアの東西にわたり広大な商業網を展開するにいたり、文化の交流にも少からざる役割をもつにいたる。

ステップにおける牧畜民族は、その常住の放牧地をもっていて、周期的にそれを順次歴訪する形をとる。その行程は五〇〇料を超えることもあり、ブラーシシュによると、六五〇〇のキルギス人はフェルガーナの谷からアライの高原地方にわたり長大な行程をたどるといわれる。一般に土地の所有觀念がうすく、定住地もできず、農耕民のごとく土地に結びつくこともない。牧畜法が原始的であるため、その年の氣候、天候、牧草の状況に支配されることも多い。分散した生活であるだけに、集団的規制も必要となり、氏族的となる傾向もみられる。遊牧の土地にも数家族共同で

一種の繩張りもできる。史上、強大な遊牧民族の国家が現われて周辺の農耕社会に侵入し、掠奪支配を行ったことはよく知られている。このような乾燥アジア史を特色づける民族の行動はいかにしてとられるにいたったのであろうか。

一九〇三年、アメリカのカリーネギ財団から派遣されたペンペリーとともに、露領トルキスタンの探検に参加したエール大学のE・ハンチントン教授は、イラン・アフガニスタン・中央アジア・インドなど諸地方の調査を基にして、彼のいわゆる脈動説を発表した。彼は歴史のコースを決定する主要な力は地理であり、その中でも特に気候が最も有力なものであるとの仮説から出発し、中央アジアを舞台として演じられた数々の民族の歴史的特質を、その気候変化を基盤として地理学的に説明せんとした。タリム盆地、カシュミール、セイスタン等の各地における調査の結果、そこには各種の地文上の変化の事実を発見、とくに過去二〇〇〇年以來広い範囲にわたる気候乾燥化の傾向を認めたのであった。その結果、遊牧地域では遊牧が不可能となり、湿潤な山間地では逆に居住に適する地域へと変わることもある。この乾燥化は常に同じ歩調で進むのではなく、時には少しばかりの湿潤化もみられる。一定の期間において乾燥化と湿潤化が交互しておこり、いわば脈動的变化のかたちをとりながら全般的には乾燥化へと向う。乾燥化によって居住が困難となるやそこに住む民族は他地域へ移動せざるのやむなきにいたり、ここに他民族居住地への侵入や他民族との間の抗争も惹起することとなる。そしてやがて国家や王朝の滅亡（たとえばローマ帝国の滅亡もこの間接的影響である）という事態も起る。乾燥化がとまり湿潤化に向うと、民族の生活は安定し、戦争も消滅、芸術や科学も発達し、文明の繁栄もみられることとなる。中央アジアを中心とする内陸アジアの民族移動や周辺地域への侵入後退もこのような要因によって説明することができるのではないか。カシュミールの湖より流れ出るジェラム溪谷の峡谷

部における地形の変化、タリム盆地における黄土の侵食や植物の枯死状態、遺址の存在、山麓地帯における泉の減少、ロブ湖の変遷、さらにまたセイスタン湖の変化やイランのキルマン地方における廢墟の存在などは、このような気候変化の事実を物語っているのではないか⁽⁶⁾。そして彼はさらにカリフォルニアにおける四五〇本のセコイア樹(樹令二五〇〜三五〇年)の年輪分析からもこのことを証明して、気候変化の事実を世界的規模において認めんとしたのである。

四、脈動説に対する異説 その一

ハンチントン教授の仮説、脈動説に対しては其の後多くの異説が出され、この歴史地理学上きわめて重要な問題についてさまざまな検討が試みられた。先ず、ハンチントン教授と全く別の方向からこの問題の解決をはかろうとするものがある。すなわち、ハンチントン教授の説くような気候変化、いや気候条件から、このアジア史の根本問題を解明することは誤りである。このような見解は歴史への自然環境の力を過大視したものであり、気候を中心とする一つの地理的決定論である。歴史の動き自体はあくまで人為的なものであって、自然環境における大きな変動との関係において外部的な理由から民族の行動が説明されなければならぬ筋合のものではない。地理的環境との関連はあるにしても、それはハンチントンの方式で説明されるべきではない。遊牧民族の周辺地域への侵入は、遊牧民族自体の生活や社会、あるいはその歴史自体の中に原因が求められなければならない。

一九三八年、O・ラチモアはその地理学雑誌における論文「蒙古史の地理的基盤」において、ラルフ・フォックスの「有史以来、中央および高アジアに嘗って大なる乾燥のあつた例はない」との説を引用し、「ステップ民の歴史は

それに隣接する森林狩猟民や農業共同体の歴史から独立しているのではない。考古学的証跡の示すところでは、この三つの生活様式の地域の間にはかつて交流があったことが知られている。これら諸地域の中間にはいわば漸移地帯とも称すべき地域があつて、これを通して生活様式の交流や転移があつた。他地域への移動は氣候変化によつて強制的に行われたものとは思えない。一九二九年、アルタイ東部のバズリクで発掘された墳墓遺物には森林の馴鹿に用いる特殊な馬鞍があつて、これは生活様式の混淆転移を示している。ステップ民の歴史は決して孤立し停滞したものではなく、他地域との関連において内部的に進化や退化の複雑な過程があつたことが明らかである。しかし、ステップには現代世界を變革したような産業技術は生み出されず、そこにはステップ生活以外のものに進化した事實は認められない。純牧畜的景觀のステップには遊牧社会以外の社会は遂に生じなかつた。ステップには自給自足の經濟が可能であつた。衣食住・交通・燃料の供給、さらに時には小規模な採鉱や冶金も行われた。したがつてステップ民は他の地域との交渉を断つこともできる。しかし、実際にはその事實はみられない。このような他地域の社会との交渉の選択は、彼らの代表である首長に委ねられていたようである。遊牧民たちはこの首長にひきつれられて隣接地域の社会へ侵入し、その日常生活にみられる軍事的行動の利点を利用して都市や農村より掠奪を行うが、逆に定住民の側からすれば遊牧民をうつてもそれより得る品は掠奪の価値からいへば失費を償うに足りぬものである。しかもステップ地域は広大であつて、定住民のステップへの積極的侵入はほとんどみられない。ステップ民の農耕民に対する侵入は益々首長の勢力を増大し、大きな種族的統一力をもたしめるが、定住民としてはステップ民への抗戦は国内の疲弊を招くのである。このようにしてつねに遊牧民の優越がみられる。だがステップ民は貧しい。遊牧民の首長は侵入の結果、貿易による新しい利益、貢納の收取、農村・都市への課税等に夢中になり、本来の首長たる職能を十分に發揮できな

くなる。それはすでに新しい別の性格をもった統治者になったことを示す。かくて彼らは没落し、敗退して本来の生活に戻る。ステップに残った貧困な連中のみが依然貯水池として残存して、遊牧的生活様式の本質が保存され、それはさらに新しい首長の抬頭とともに再び侵入することとなる。蒙古の周辺に、時には農業や都市が間歇的に出現し、繁栄し抹殺されたのは、遊牧社会が一再ならず部分的に変改されてオアシス住民の生活様式に近似するにいたったことを示していると説く⁷⁾。ステップの地理的特殊性に基く生活様式の固定化、隣接する他の自然地域とその生活様式、これら諸地域との交渉、このような地理的条件は意義があるが、侵入への要因となるものは気候変化ではなく、遊牧社会の中に胚胎するにいたるものであるとするのである。

また松田寿男氏(中央アジア史)は、「遊牧民の生活の基礎となつている牧畜経済は極めて単純であり一面的であつて農業経済の比ではない。農業では農具や肥料の改良、灌漑法の発達などによって一定面積の土地ですら収穫を高を高めることができる。しかし、遊牧家畜の増殖はそうはいかない。また気候の変調や疫病等により多数の斃死を出す怖れさえある。したがって草原の民はつねに畜類の栄養に留意し病気を防がねばならぬが、このような消極的方法さえまだ実行されていない所が多い。いわんや飼料の貯蔵とか改良等については何らの関心も示されなかった。モンゴリアの社会を歴史的に調査したある人は、昔からこの地方の人口は飽和状態であつたと結論している。若しそうだとすると、それは人口の増加に対して牧畜法の発達が極めて遅れていたためであらう。しかるに遊牧民は、一度国家を建てるのと飛躍的な発展を示した。それは、彼らは単純にして一面的で発展性の乏しい牧畜経済に身を委ねていたから、その欠陥を何らかの方法で補わんとし、それに並々ならぬ熱意を示し、暴力手段に訴えて富を獲得する掠奪行為、家畜や毛皮などを供給する隷属部族や農耕生産品を貢納する農耕村落の占有を目的とする征服行為、さらに物資の交換

や仲継によって富の増大を企図する商的行爲が彼らによって行われた。もちろんこれは遊牧民相互の間に行われていたが、また彼らと異つた生活様式をもつ農耕民や森林狩猟民に対しては特に顕著であつた。」そしてこうした行爲は決して支那に対してのみ行われたのではなく、トルキスタンの漠島地帯に対して最も激しくまた露骨であつた。ことにこの地帯は古代における國際貿易の中心であつただけに彼らの掠奪欲、支配欲にはいつその拍車が加えられた。しかもこの地は小国散在の有様であつたので、事態は支那より深刻であつた。「こうした行爲を行うには、単独部族の力ではほとんど不可能であり、そこに大規模な部族同盟すなわち遊牧国家の出現が促進される。かくみれば草原民の掠奪は彼らによつて立つ經濟の欠陥がもたらした社会的欲求に起因する一種の物資輸入の手段とみるべきであらう。しかし、これは決して遊牧民の特技ではなく、交易船が海賊船に変わるのと何らの相異なく、一連の經濟活動にすぎない。」「彼らの建設した国は以上のことからして、ほとんど商業国家であつたとみて差支えない。しかも一度び国家が弱体化しあるいは瓦解すると、それを構成していた部族同盟間の連帯がゆるみまた断たれてしまう。社会生活も複雑さを失ひ後退したかの觀を呈する。箔を落した彼ら牧民群は、新しく国家を組立てて再びその箔を附加しようと努力する。こうして遊牧民の社会は、あたかも病人の体温表のように一高一低一進一退をつづけた。」と述べ、中央アジアを中心とする乾燥地域における草原とオアシス地域の配置、およびそれらの諸地域の自然との関わりにおける生活や社会の特殊性、諸地域相互の關係などから、諸民族の、主としてその經濟活動より解明する。この場合、氣候変化という地理的条件はとくにとりあげられず、以上のごとき別の角度よりする地理的条件から説明されている。

さらに飯塚浩二氏（人文地理学）は次のごとく説明される。彼ら遊牧民民族国家の政策は、その目的とするところはほとんど掠奪であり、そこに政權を維持せんとしたり自己の版圖を拡大せんとする意圖は含まれていなかったかもし

れず、モンゴルのごとき遊牧民族国家は、当時アジア大陸を横切る東西交通の諸要所を占拠することにより、隊商の形における商業資本の利益をもって政策の第一位においていたことを指摘し、遊牧国家の征服した諸地域では都市の商工業が振興したり、長大な距離にわたる交通体系の整備のあったことを挙げ、遊牧民族と隊商商人との間に一種の相利共棲の關係があったことを述べる。すなわち、当時草原の生活者が常に目標としたのは、当時世界交通の要所たるアジア大陸中央の隊商路であり、そこに並ぶ諸集落であったのである。そして後に海上ルートの発達と共にこの陸の交通路が衰微した後は、これと相利共棲の關係にあった遊牧国家も往時の盛大さを失って終つたものと考えることが出来る。アジア中央部のオアシス地帯を通る世界の交通路、そしてその周辺のステップに住む遊牧民族社会の特質とそれに対する關係が、遊牧民族の史上にみられるごとき行動の要因であったことが指摘されている(9)。

遊牧民族の行動を条件づけるものは草原の自然とそれに基づく生活の特殊性、乾燥地域における種々の自然地域の配置、他地域との關係といった地理的条件であつて、その動因はそのような条件に基づく経済的社会的なものであつて、氣候変化のような地理的条件によって強いられたものではなく、たとえ氣候変化のような条件がなくても、他の地理的条件から説明することができる。しかし、氣候変化による説明の場合でも、草原の経済生活の特殊性とその窮迫に基づく移動ということになるのであつて、要はこの地理的条件のとらえ方扱い方の問題にあると考えられる。

五、脈動説に対する異説 その二

次に、氣候変化の事実を認めながら、別の角度から遊牧民の進退を説明するものがある。

歴史家トインビーは、氣候変化の事実をハドソンの見解を支持して認める。ハドソンは、乾燥地域においては砂漠

・牧地・良牧地・森林がその中心より周辺へと順次に地帯をなして分布するが、乾燥化が起つた場合、決して牧地の減少を来さず、中心の砂漠の拡大に伴い、これらの地帯がより周辺地域へとそのままの順序で移動するにすぎないものであるとする。以上を前提として、トインビーは次のごとく考える。ステップの地理的条件によってその住民は極めて特殊化された生活方法のもち主となる。その社会は高度に特殊化され、その結果、内部での進化は困難となる。かくて遊牧民の歴史は機械的に指導されることとなり、気候の乾燥化によりステップを追放されることもあり、また定着文明を侵略、征服に心惹かれてステップをうって出ることもある。しかし、この機械的な動きは、遊牧民自体の生活の性格を変えることはできない。たとえばオスマントルコのごとく一定期間存続するが、この場合必ず「羊の牧羊者から人間の牧羊者に変化する」のである。遊牧民は乾燥期に定住諸国への侵入を行い、湿潤期には逆に定住民が遊牧ステップへ進出してくる。一三世紀中垂の乾燥は蒙古の進出を惹き起した。一四世紀初頭には湿潤へと向い、蒙古人の退潮がみられる。もちろん、定住地を攻撃する遊牧民は、必ずしも自らの居住地の乾燥化によってうって出るとは限らず、乾燥せる他地域の種族から攻撃をうけて企図せざる行動を開始することもある。トインビーは乾燥化の事実を認めて以上の如く説明する¹⁰。

ここで以上の諸説を念頭にしながら、この問題の焦点は何かを考えてみたい。

まず、内陸アジアの歴史地理的説明には、内陸アジアのもつ地理的特質が基盤となる。そしてそれに基くオアシスの生活、ステップの生活のもつ特殊性が中心問題となる。とくにステップ住民の移動はいかなることが要因となり、条件となっているかということである。その場合、まず考えられることはステップ住民の生活様式であり社会である。その中に移動の要因がひそんでいるとみることもできる。とともにその場合、条件の一つとしてあげられること

は、ステップに近いオアシス地帯を通る古い時代の商業交通路の存在である。この事実を無視することはできないが、草原の地理的条件の一つとして気候乾燥化があった場合、このような遊牧民の移動を強いる結果もあらわれるであらう。それは遊牧社会内部の事情に起因するものでなくとも、乾燥化によって移動を余儀なくされることもあり得るとしなければならぬ。もとより乾燥化の事実がたとえあったにせよ、以上みたような気候乾燥化以外の要因や条件も当然考慮されなければならないものであらう。しかし、ハンチントンによって発表された気候乾燥化の事実が、はたしてあったかどうかの問題がまず解決されねばならぬ。この問題についての学問的な吟味をしないで、頭からそのような事実はないか、あるいはそのようなことから考えるのは古い地理的決定論的思想によるものであって、全くとるに足らぬものであるとしてはじめから問題としない態度は、明らかにハンチントン説の批判にもならなければ、また科学的な解決方法であるとはいえないのではないか。まず気候変化の事実があったか無かったか。そして次に若しあったとするなら、それが遊牧民の移動やその歴史にどのような関わりをもつものか。その場合、ハンチントン説やトインビー説のように解釈してよいものかどうか。また、気候変化の事実がなかった場合、ラチモア説や松田説、飯塚説でよいかどうかを検討されることとなる。かくてこの問題の根本は、気候変化の事実を自然地理学的に解明することである。ハンチントン説には二つの問題点が存在すると思われる。一つは気候変化の有無、他の一つはそのような地理的条件がどのようにその社会や歴史に関わりをもつものなのかということである。ハンチントン説を若し地理的決定論であると断じるなら、これは明らかに後者の問題であって前者のそれではないのである。

気候変化説に関しては、種々の意見が出されている。バックストン、クラブ、ソワビなどをはじめ、気候変化を何らかの形で認めんとする者のあるに對し、それに反對する者も現われている。ヘーデン、ベルグ、ヘルベットなど

の見解はそれで、これを二大別して、まず諸河川の水量の減少を認めるが、その原因を気候変化以外のものに求めんとするもの、次に気候変化はもちろん、水量の減少も認めず、ハンチントンらによって報告されている事実を全く別の方向から説明せんとするものである。スタインは砂漠中の遺址の存在を、河の水量や長さの減少縮小によるものとし、これをバラードやフィツカー、あるいはリックマースと同じく、水期以後における高山地方の氷河の縮小の継続によるものであるとする。トリンクラーは水量の減少の原因をヒマラヤの上昇により海洋からの影響が減少したこと
に帰し、テラは山地より流れ出る河川がつくる扇状地における伏水面から考え、河川の出口附近の侵食による後退から末端地域の伏水帯の後退、したがってその地域の乾燥化を説いた。さらに楼蘭の遺址とタリム河の水量との関係については、ヘーデンによってロブ湖の変遷の面から説明されている(11)。

また、保柳睦美氏は、タリム盆地の河川には、時代によってその流量に変動があったことを指摘され、これはその水源である崑崙山地や天山の雪原、氷河の消長と密接な関係があったとされる。そして、とくに崑崙山地における消長は、この山地からの流量の変動に大きな影響を与えたが、これが古代の町の放棄や滅亡の原因となったかどうかは確実な証拠がないという(12)。

このように気候変化の事実については、自然地理学上にも未解決の問題が多く、この解明は今後の調査に俟たなければならぬ。そしてこの問題の解決に基いて、いわば内陸アジアの歴史の基盤としての地理的自然の状況が明らかにされることにより、はじめて正しい歴史地理学的解明もなし得るものと思われる。

六、むすび

筆者はここで、内陸アジア史についての歴史地理学的解明に関し、新説を提唱せんとするものではない。この解明には、以上述べたような極めて複雑な難問題が未解決のまま多数残されている。これらは詳細な現地調査をまっけてはじめて解決されなければならぬものであって、机上で考えられることではない。現地調査によらないで、借物の理論から解釈したり批判したりすることは、真に実証的科学的の方法とは云い難い。それは一応、仮説として提出されることはあつても、問題の解決ではない。文献的検討の必要性は当然のことながら、交通不便な古代において、遙々ペルシヤまで足を伸ばし、その実証主義を貫いたヘロドトスを想起すべきであらう。

歴史地理学は、地表の諸居住地域が「なぜ、そのようになり来たか」の課題に答え、その地理学的解明を行わんとするものであって、それ自体、人文地理学の一分野を構成するとともに、人文地理学にとって欠くべからざる研究方法、あるいは研究操作であることである。かかる歴史地理学の研究にとって必要なことは、詳細にして正確な地域的資料の獲得と厳正な地理学的解釈であるが、ここでは自然地理学的資料の必要性が改めて強調されねばならない。歴史はあくまで人間の歴史であつて、その変化発展の動因は社会の中、歴史の中に存在するとはいいいながら、歴史地理学的解明にとって必要なことは、その条件となる地域の自然の状態である。地理的決定論の誤りは、その地理的自然を扱うがゆえではなく、その扱い方にあるのである。

（本稿はかつて「富士論叢」第三巻―富士大世政治経済研究会、昭和三年一月―に、「地理と歴史との間―歴史地理学への断想―」と題して掲載された拙稿に部分的に加筆したものであるが、論旨はほとんど変わりなく、現在もなお筆者の歴史地理学に関する見解の一端を示すものである。本稿を、昭和五年七月三日に古稀を迎えられた同郷出身の竹内常行氏―早稲田大学教授、本会評議員・会計監査―に記念として献呈したい。）

- (1) 田中秀央・黒田正利「ギリシヤ文学史」昭和一四年
- (2) 羽仁五郎「歴史学における素朴唯物論―地理的史観の批判」昭和五年、史学雑誌
- (3) 高山岩男「歴史の地理性と地理の歴史性」昭和一五年、思想
- (4) 内村鑑三「地理学考」
- (5) 高山岩男、前掲論文
- (6) E・ハンチントン「アジアの脈動」一九〇七年
- (7) 後藤富男訳「農業支那と遊牧民族」生活社刊（昭和一五年）による
- (8) 松田寿男「漠北と南海」昭和一七年
- (9) 飯塚浩二「世界史における東洋社会」昭和二三年
- (10) O・ラチモア前掲論文による
- (11) 保柳睦美「北支・蒙古の地理」昭和一九年
- (12) 保柳睦美「シルク・ロード地帯の自然の変遷」昭和五一年、なお保柳氏は同書においてハンチントンの脈動説に関し、
「このような仮説で、いろいろな歴史的事件まで一挙に説明しようとする態度には賛成できないが、さればと云ってこの仮説の真意を理解しようとしてもしないで、自分自身の孫引的知識や独断的曲解で反対しているにすぎない人が多いことは、むしろハンチントンに気の毒なくらいである」と述べられている。（同書四三～四四頁）